熊本県立熊本西高等学校　令和４年度（２０２２度）学校評価表

１ 学校教育目標

「清・明・和」の校訓を根幹とし、知・徳・体の調和の取れた文武両道の教育をとおして生徒一人ひとりと深く関わり、きめ細かい指導とアカデミックインターンシップや探究活動などの充実した教育プログラムで生徒の可能性を伸ばし、生徒の夢や目標を実現する世界的視野に立った人材の育成を目指す。

２ 本年度の重点目標

１ 生徒理解　　～ 個に応じた、個を大切にしたきめ細かい支援
２ 学力の向上　　～ ＩＣＴを活用した授業改善、自ら学ぶ力と態度を養う
３ 人間的な成長　～ 基本的生活習慣及び社会に積極的に関わる姿勢確立
４ 自己の伸長　　～ 学校行事、生徒会活動、そして探究活動の充実
５ 進路目標実現　～ 一人ひとりの視野を広げ、意識を高める進路指導

高校３年間で「生徒を大きく伸ばす」ために、一人ひとりに応じたきめ細かい指導に 全職員で取り組む。特にＩＣＴを積極的に活用し授業改善を図り、生徒の主体的な学習を促進する。また、体育的行事はじめ各種の学校行事、生徒会活動、そして大学や企業、地域社会と連携した探究活動など、生徒が主体的に体験する場を適切に設け、生徒の人間的な成長を図る。 教育のＩＣＴ化と豊富な体験活動の両立による全人教育を推進し、進路実現に結びつけ、「選ばれる学校」として地域の信頼を高める。

３ 自己評価総括表

評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学校経営	開かれた学校づくり	広報活動の充実と学校行事の活用	・広報誌（西風や西高新聞）の内容を充実させる。	・担当部署や育西会との連携のもと、学校全体として取り組む。	A	・「西高新聞」は県下全中学校に今年度も配付した。育西会「西風」は広報委員会を中心に発行し、有意義な広報誌となった。
		西高の魅力発信の工夫	・ＨＰ・ＳＮＳ等を通した情報発信を積極的に行う。	・Ｗｅｂ上で生徒の諸活動を随時写真入りで発信し、特に中学生に対し西高での充実した学校生活をＰＲする。また、以下の点を、積極的に進める。 ①各学科・コース紹介ページの整理・発信方法を工夫する。 ②一人一台端末の実践例をGoogleのネットワークを活用してＰＲする。	B	・昨年同様、学校公式ＨＰとインスタグラムを活用して、各学科やコースの特色ある活動の写真を中心に発信を行った。 ・本校にて継続的に取り組んできた端末活用例をＰＲした結果、本年度新たにGoogle の教育活用事例校に認定された。
	地域とつながり、地域に選ばれる学校づくり	異校種間の連携	・高大連携、中高連携、そして小高連携の取組を通じて、本校の魅力創造・発信を推進する。また参加した生徒の達成感、自己肯定感に繋がるようにする。	・従来の取組に加えて、探究活動を通じた中高連携、小高連携の取組を実施し、その成果を外部に発信する。	B	・高大連携は、体育コースが熊本保健科学大学と連携事業を開始したこと、県のone team事業を活用して特進コースが崇城大学と連携事業を行ったことが成果である。また２年生の地域探究の成果発表を学校運営協議会の高大連携部会及び中高連携部会の委員に参観していただき意見交換を行った。ただ、探究活動を通じた中高連携は、中学校との情報共有で終わり実働に繋げられなかった。小高連携では、コロナ禍により学習支援が実施できなかったが、１２月に英語かるた交流、１月には野球部による技術指導が実施でき、この取組の様子は新聞にも掲載された。
		生徒募集の工夫	・生徒募集について、近隣中学校と「顔の見える関係」を築き、本校志望者を増やす。	・体験入学、中学校説明会について、新型コロナウイルス感染対策を優先させつつ、取組内容を精査する。 ・西区の各中学校に訪問担当者を割り振り、本校の最新情報を「西高新聞号外（仮称）」を作成して配付したり、各中３年担任等と情報交換を行ったりする。	B	・体験入学案内を戦略的、組織的に実施し、昨年度より参加者数を大幅に増やした。個別対応についても１２月まで随時行い学校の魅力発信に努めた。中学校訪問は、昨年度までの訪問実績校から、中学生の進路志望動向分析を元に、新たな訪問校を開拓し６回程訪問した。主に中学３年担当者と対面し、「顔の見える関係」を構築した。今年度は育西会役員会でも生徒募集について意見や提案をいただき、それを中学校の生徒・職員に伝えることができた。西高新聞以外の学校広報誌は、体育コース紹介にとどまってしまった。
		地域との連携	・地域の方々と連携した活動を通して、「西区の西高」としての存在意義を高め、生徒が地域に貢献することで、生徒自身の自己有用感、自己肯定感を高める。	・ボランティアや部活動交流に加え、探究活動による地域連携事業を推進し、その成果報告を地域に向けて行う。	B	・部活動交流では、複数の部活動で中学校との合同練習等の交流を行った。 ・地域探究において地域の人材を活用した取組を充実させることができたが、地域の課題解決に向けた発信については今後の課題である。 ・様々な取組を通して、生徒から自主的な言動がみられるようになったことは成果である一方、外部と連携して行う活動や発表が多く、生徒・教員の双方とも

						負担となっている面もあり、精選や効率化を研究していく必要がある。
	業務改善・働き方改革	ＩＣＴ等を活用した業務改革	・一人一台端末を学校職員全体で活用し、業務の改善に取り組む。 ・職員の業務改善や保護者とのコミュニケーションツールとして Classroom を活用する。	・職員会議等の資料を原則ペーパーレス化し、印刷や書類の整理に係る負担を軽減するとともに資源の節約を行う。 ・職員 Classroom を作成し、アンケート等の実施・集計を効率化する。また、保護者 Classroom を各学年・クラスの連絡や行事の配信等で活用する。	A	・年度当初の職員会議より資料を職員 Classroom を活用してのペーパーレス化をしたり、職員研修やアンケート（１０回）をオンラインにて実施したりして、業務の効率化を実現した。 ・保護者 Classroom は学年や各クラスの連絡、体育大会や創立記念祭の保護者向け配信に活用した。 ・業務上の３種類のメール、ＨＰや Classroom など、現在運用している多くある発信チャネルを効果的に活用していくための方法を今後検討していく。
		働き方改革の推進	・業務負担の平準化と職員の働き方改革に係る意識の変容を図る。	・学校閉庁日及び定時退勤デーを設定する。 ・安全衛生委員会を通じて、細やかな面談や助言を行うとともに、主任主事による各分掌の状況把握を行い、適正な業務分担を進める。	B	・学校閉庁日や定時退勤デーを設定できた。後者については、昨年度と比較しても概ねほとんどの教員が定時退勤できた。 ・主任主事との面談を実施し適正な業務分担について検討したが、なかなか改善が進んでいない。また、職員の在校時間については、コロナ前と比較しても減少しているが十分とは言えない。
学力向上	わかる授業魅力ある授業への転換	授業による学力向上	・授業内容の一層の改善を図り、基礎的・基本的な学力の定着を進める。	・年二回設定している研究授業旬間を利用し、他教科にも学びながら基礎的・基本的な学力向上の方策を探る。	C	・都合により、今年度は１回のみの実施となったが、他教科からの視点で参観者から意見をもらうなど相互検証ができた。
		ＩＣＴ等を活用した授業改革	・一人一台端末を教育活動の中で日常的に活用する。 ［指標：くまもとＩＣＴ指数］Class-KI30 （授業時間の 30%の活用）及び Unit-KI50(単元時数の 50%の活用)	・教科の特性に応じ端末の利活用目標を設ける。 ・各教科で端末を用いた「主体的で対話的で深い学び」をテーマとした研修を行う。	B	・Unit-KI：教員活用６２ 生徒活用３８（１２月調査）日常的な活用は定着しつつあるが、より広く活用されるよう研修を継続していきたい。 ・一人一台端末先行実践校として、端末活用について２学期に全県立高校に研究授業動画をオンラインで公開した。
	計画的な学習指導の充実	計画的な学習指導と適正な評価	・観点別評価を意識し、単元テストや定期考査の出題内容を意識する。	・学期ごとに、各教科内で実践事例報告をし、２学期には、教科の枠を超えて情報交換できる場を設ける。	C	・教科内での実践事例に係る情報交換はできているが、教科の枠を越えての情報交換に至っておらず、次年度に向けての課題の一つである。
キャリア教育（進路指導）	キャリア教育	ポートフォリオの充実	・生徒のキャリアを着実に積み上げ多様な入試に対応する。	・セルフチェックノート等によるポートフォリオやキャリアパスポートを通して振り返りながら生徒の主体性を伸長させる。 ・各学年の進路研修会を充実し、全校で情報を共有する。	B	・セルフチェックノートはレイアウトを変更したことで、前年度より活用しやすくなった。一方で、活用方法や頻度については今後も研究していく。
	一人一人の進路目標達成	進路実績	・昨年度を上回る進路実績を実現する（進学１００%決定・国公立大学１５名・公務員指導の充実・就職１００%決定）。	・全職員による進路指導の充実を図り、進路相談、面談を計画的に設定するとともに必要に応じて随時実施する。 ・個別指導・面接指導・学力検討会を充実させる。	B	・学力面で不安があったが、進路相談や面談を重ね生徒と教員の信頼関係を深めた結果、順調に進路保障に繋がった。 ・現３年生の３年間を振り返り、次のサイクルや現１・２年生の指導や支援について検討する必要がある。
		進路意識の涵養	・夢や希望を与える取組を実施する。 ・アカデミックインターンシップ（ＮＡＩＳ）及びインターンシップを充実させる。	・日本や熊本で活躍する人による講演会を実施する。 ・生徒の適性を考慮したＮＡＩＳ及びインターンシップを実施する。 ・地元企業や同窓会と連携し幅広い受入先企業の開拓を進める。	B	・いずれの取組も生徒と受け入れ先からの評価は高いが、準備する教員の負担となっている面もあり、精選や効率的な実施方法を研究していく。
生徒指導	交通安全	交通事故・マナー違反をなくす	・重傷事故ゼロ、交通事故件数を前年度より減少（昨年２５件）させる。 ・自転車ヘルメットの着用を促進する。	・毎月１１日を「交通安全の日」とし、警察・育西会・交通委員で交通指導を行う。 ・交通安全集会や広報等を通して、ヘルメット着用の重要性を呼びかける。	B	・重傷事故はなく、交通事故の件数も減少した。しかし、左右確認や一旦停止を確実に行えば防げた事故もあった。学期に一度の警察との交通指導は継続していきたい。 ・新入生のヘルメット購入者は８名。昨年度より若干増えたが、毎日かぶって登校している生徒は３名程である。生徒もヘルメットの重要性は理解しているが、定着は難しいのが現実である。そのため、生徒や保護者との対話を通して

						ヘルメットの着用率向上を目指していく。
	基本的生活習慣の確立	時間厳守 爽やかな挨拶 正しい着こなし	・挨拶、時間厳守、服装について、生徒の主体的な取組を通じて徹底を図る。 「指標：生徒アンケート」（３．７）（前年３．４８）	・職員・生徒会による遅刻指導、あいさつ運動を行う。 ・服装頭髪検査前に風紀委員によるチェックを行い、違反者ゼロを目指す。 ・「校則」の見直しについて、生徒会や保護者との意見交換の場を設ける。	B	・検査前には風紀委員による呼びかけを行い、整容面での指導を受ける生徒は減少している。 ・２学期と３学期に実施した育西会との意見交換会では、制服や学校行事など様々な意見が出た。「校則」について検討し、より良い学校生活が送れるよう見直すべきところは見直していきたい。
	主体的・能動的言動の育成	各行事における生徒の自主性の育成を図り、高い志及び目標を持った高校生活実現の支援（プラスワンの指導）	・生徒が主体となった行事の企画と運営を進める。 ・生徒が目標を持って、学校生活を送る。	・体育大会、創立記念祭、クラスマッチにおいて、生徒会を中心とした生徒主体の取組に移行し、生徒のアイデアを積極的に取り入れる。 ・全職員による様々な場面での声かけや励まし等の支援を行う。 ・「授業に取り組む姿勢を改善しよう」等、生徒自身の意識や姿勢の向上を図る。	A	・コロナ禍で短縮での体育大会、創立記念祭、クラスマッチだったが、生徒会を中心に自主的に運営でき多くの生徒が充実感を味わうことができた。 ・授業改善を目的に各クラスで話し合いの場を設けた。クラス目標を立て、授業への意識や姿勢を高めていった。充実した学校生活への支援や声かけを継続していく。
	美化、環境意識の高揚	掃除への意識高揚、環境ＩＳＯの取組推進	・美化・省エネの徹底を図る。 「指標：生徒アンケート」（３．２）（前年３．０７）	・掃除箇所・担当を見直し、掃除指導の徹底を図り、学期に一度美化コンクールを実施する。 ・細めな消灯・節電・節水を生徒会と連携して進める。	B	・週３日の掃除であるが、生徒・職員ともに取組は良くなった。駐輪場や教室環境も良くなってきている。長期休業中には部活動で掃除箇所・期間を設け実施した。
人権教育の推進	職員研修の充実	人権教育の基本的認識の確立とその共有	・校内研修を充実する。 ・特別支援教育を充実する。	・人権や命の問題についての知識や考察を深める研修を実施する。 ・合理的配慮、個別の教育支援計画の実施を進める。	B	・人権同和教育課から講師を招き、人権の重要課題とともにすべての教育活動を通じた人権教育の推進についての理解を深めることができた。 ・個別の支援計画に基づいた指導や状況に応じてＳＣ・ＳＳＷと連携して対応することができた。
	命を大切にする心を育む指導	自尊感情及び他者を尊重する態度の育成	・命を大切にする心の育成の充実を図る。 ・生徒および職員の心身のストレス軽減を図る。	・授業等で命の大切さについて学ぶ機会を、各職員が２学期までに１回以上設定する。 ・ストレスマネジメントやリラクゼーション等の知識や技能について定期的に啓発と促進を行う。 ・西高コミュニケーションサークル（ＮＣＣ）を実施する。 ・担任のコンサルテーションを行う。	A	・各授業、各学級において、機会を捉えて命の大切さや自尊感情の育成やそうした雰囲気の醸成を図ることができた。 ・１・２年生では学年全体でソーシャルスキルトレーニングを実施することができた。また、希望する生徒及び職員に対してＳＣ面談の場を昨年度以上に設けることができた。 ・必要とする生徒に対して、回数は少なかったが実施することができた。
いじめの防止等	人権意識の育成	いじめをしない、許さない心の育成	・いじめ解消率１００％にする。 ・生徒会による取組を充実させる。 ・外部専門家の活用を推進する。	・本校の「いじめ防止基本方針」に従い、未然防止および早期対応の実施を図る。 ・本校独自の「こころのアンケート」の実施と活用を進める。 ・生徒会による取組への指導、支援を行う。 ・ＳＣ、ＳＳＷ、医療機関等との積極的な連携と情報交換を図る。	B	・いじめの訴えに対して、組織で連携した対応を図ることができた。今後は初期対応の時点でより法に則った対応を行うことが課題である。 ・生徒会が主となった取組は行えなかったが、各クラスにおいていじめをしない、許さないクラスの風土醸成のための標語作成などを実施することができた。 ・入学前面談を実施し、１年間ＳＳＷとの面談を実施した結果、学校生活や家庭での課題に迅速に対応することができた。また、ＳＣ面談を通して医療機関につなぐことができた。外部専門機関とも連携を図り、生徒の情報交換を密にすることができた。

地域連携（ｺﾐｭﾆﾃｨ・ｽｸｰﾙなど）	地域・保護者・関係機関等との連携	学校運営協議会の活用による地域連携の強化及び円滑化	・学校運営協議会による学校評価や魅力化、活性化に向けた取組の検証、および地域防災体制の強化を図る。	・学校運営協議会の高大連携、中高連携、地域連携の三部会体制について整備する。 ・年２回の全体会開催と複数回の部会開催を進める。 ・学校行事（創立記念祭・チャレンジウォーク等）をとおした地域住民、地域の小中学校、関係行政機関、保護者との連携の充実を図る。 ・地域の方々と連携した防災・減災訓練を実施する。 ・生徒個人の防災力を高めるためＩＣＴを活用した防災・減災訓練を実施する。	B	・計画通り三部会体制の学校運営協議会を発足させることができた。部会も合わせて計７回開催し、地域や関係機関との連携が進んだ。ＩＣＴを活用した防災・減災訓練も実施でき、県の危機管理防災課からの視察もあった。
特色ある教育	サイエンス情報科の充実	研究活動の充実 志望者の増加	・高大連携による実習などサイエンス情報科の活動を着実に実施する。 ・発表会、コンテストでの入賞を目指す。 ・特色的な教育活動を積極的に中学校や地域へ発信する。	・大学との事前協議を綿密に行うなど活動の充実を図り、外部への積極的な情報発信を行う。 ・課題研究の進め方の改善や講座内容の調整を行う。 ・科学イベントへの積極的な参加を促す。 ・サイエンス情報科体験プログラムを実施する。 ・学校説明会や地域へのサイエンス情報科の魅力発信について工夫する。	A	・高大連携による実習も、コロナ感染拡大の影響を受け調整が必要なことも多かったが概ね実施できた。久しぶりに開催された対面での科学の祭典にも多数の生徒がボランティアとして参加してくれ、企画全体にも貢献できた。課題研究でも内容の深化が見られた。 ・オープンスクールでのサイエンス情報科体験プログラムにも多数の中学生が参加してくれた。学校説明会でも地道に情報発信を積み重ねることができた。
	体育コースの充実	専攻授業・実習の充実 志望者の増加	・スポーツを「する・みる・しる・ささえる」という観点から自己研鑽に努め、将来、指導的役割を担う人材の育成を目指す。 ・スポーツ活動を通して「知育」「徳育」「体育」のバランスのとれた教育活動を実践し、志望者数の増加を目指す。	・スポーツを多角的視点で分析する力を養うなどスポーツを科学するという取組を大学や地域と連携し、探究活動を充実させる。 ・生徒が体験する場を設け、主体的な学習を促進する。 ・小中学校や地域スポーツクラブとの交流を進めるとともに、大会役員ボランティア等に積極的に参画させる。 ・志望者数の増加に向けて、体育コースの魅力発信のため広報活動を充実させる。	A	・熊本保健科学大学との高大連携を推進、実施。体育コース総合演習としての取組として１２月に１年生の授業体験、２年生の動作解析の実習を実施。今年度の取組を振り返り、３年次の研究発表に繋げる取組を検討する。 ・ラグビーレガシーイベントに参加し、小学生や中学生との交流を図った。コロナの影響で、この２年間中高連携が図れていない。近隣中学校との関係の再構築が必要。 ・体育コースのチラシを作成して中学校へ配付したり、オープンスクールで専攻６種目の紹介をしたりしてＰＲができた。 ・各専攻において中学校との合同練習等に取り組んでいる。
	普通科の充実	取組の質的転換	・一人一台端末を活用した能動的な学習への転換を図る。	・「理数探究基礎」等の時間を活用し、文章作成やプレゼンテーションなど、情報活用能力を生徒に身につけさせ、発信力を高める。 ・様々な学習成果を融合させて、新たな視点や取組を生み出す機会を増やす。	B	・「理数探究基礎」では、情報科、数学科、理科を中心とした授業を実施し、情報活用能力等の探究活動へつながる基礎力定着を図ることができた。 ・Chromebook を活用する割合は増加傾向にあり、生徒も慣れてきた。職員の授業力向上にも繋がっている。
新型コロナウイルスへの対策	新型コロナウイルスへの対策	新型コロナウイルス感染拡大防止対策	・校内体制の充実を図り、日常的な感染未然防止の指導を適切に進める。 ・新しい生活様式に係る啓発を進め、健康環境について自己管理できる生徒を育成する。	・感染拡大の状況に応じて、オンライン授業などＩＣＴを活用した教育活動を進め、学習の遅れがないよう支援する。 ・「今後のコロナ対策について（生命の安全を第一に考えて）」を感染状況に応じて適宜改訂し、生徒会や保健委員会などの活動を通して、生徒による健康環境の自己管理能力を高める。	A	・濃厚接触者等で自宅待機の生徒に対し、個別の学習支援として、組織的に迅速ＩＣＴを活用した学習支援ができた。学級閉鎖中にも学習支援を同様に行った。 ・体育の授業において、コロナの状況に応じて、集合授業を各クラスでのＩＣＴを利用した体育理論に変更した。体育においては実技授業であり、欠課時数との兼ね合いが懸念される。 ・感染状況や最新データや公文等に応じながら、改訂と日常的な感染未然防止の指導や継続的な啓発等を進めた。

４　学校関係者評価

地域住民、行政、教育関係、保護者等の立場から幅広く意見をいただいた。

（１）本校の教育スローガン等について

・生徒を変えるには教職員がまず変わる必要がある。「熱意」「熱量」を持った教職員がしっかりと評価されるシステムが、人材輩出の機関としては重要である。
・各種取組を継続することで「西区の西高」として入学者も増えると考えている。
・人間的な成長を図る取組が、西高の最も大きな長所と考える。

（２）生徒指導、学習指導、進路指導等について

・ヘルメット着用は家計の負担の面もあり強制が難しいが、自転車通学生が９割近いことを考えれば大切である。育西会も保護者アンケートや生徒会との意見交換を進め、着用率向上に協力したい。
・西高生の成長と自己実現のために地域としても手助けしたい。
・安心安全な通学をお願いしたい。地域としても安心安全なまちづくりに努めていきたい。
・「学力の向上」の指標が下がっている。教育の根幹に関わることであり、原因を究明し次年度に活かしてもらいたい。
・進路目標実現において、進学・就職共に１００％に近い決定、特に公務員指導の充実が目を引いている。
・インターンシップを受け入れているが西高生は真面目に取り組んでいた。市としても優秀な人材確保の観点からも、市役所を将来の就職先の候補に入れてもらいたい。
・多様な進路希望者がいる中で、細やかなサポートができており、その指導においては県内でもトップクラスの素晴らしいサービスを提供している高校と考えている。
・サイエンス情報科では、高大連携の今後の展開が楽しみである。
・体育コースからスポーツコースに名称変更することで、どのように変化していくか期待したい。

（３）地域や異校種等との連携について

・学校運営協議会も三部会体制をとるなど拡充が進み、地域とのつながりがより強化されている。
・体育系部活動の活躍も顕著であるが、書道や美術など文化系部活動の取組も素晴らしい。地域の学校として、西高生の作品等を地域の人たちの目に触れるようにしてはどうか。
・マイタイムラインづくりや避難訓練など地域と連携した、より実践的な取組は継続・拡充してもらいたい。
・ボランティア活動をさらに広げ、地域に密着した活動を通して地域からの信頼を得ていってもらいたい。
・新型コロナの状況にもよるが、体育大会や創立記念祭等の中学生・地域への積極的な公開をお願いしたい。
・部活動に係る連携もお願いしたい。

５　総合評価

（１）学校教育目標

アンケートでは、本校の「校訓」、「教育理念（文武両道）」の実践について、生徒の評価が上昇した。コロナ禍ではあったが、西高アカデミックインターンシップや体育大会・創立記念祭・チャレンジウォークなど、生徒の可能性を伸ばすための各種取組は、生徒会を中心に職員・育西会（保護者）・西峰会（同窓会）・外部機関等が連携し、充実したものとなり、生徒の評価が上昇したことに繋がっていると分析している。また、生徒の夢や目標を実現する世界的視野に立った人材の育成という点では、台湾・シンガポールの修学旅行は国内旅行に切り替えて実施することになったが、熊本の地を離れて視点を変えて物事を見る力を養ったり、県指定イノベーションハイスクールや探究活動等の取組において、他校生や地域との交流を活性化させたことで他者とのつながり方を身に付けた生徒が増えたと考えている。

（２）重点目標

「生徒理解～個に応じた、個を大切にしたきめ細かい支援」では、「西高の先生は生徒の悩みや相談に親身になって応じている」の項目では、生徒からの評価は過去３年間では一番評価が高く、職員の「様々な場面で生徒に対しての声掛け、励ましを行っている」の項目も同様であった。一方で、保護者からの評価は過去３年間で一番評価が低く、保護者との連携や情報共有が課題となっている。

「学力の向上～　ＩＣＴを活用した授業改善、自ら学ぶ力と態度を養う」では、ＩＣＴの活用という点において生徒と職員の評価は上がっているが、保護者の評価はそうではないことから、授業改善の状況を保護者や地域の方に知ってもらい、理解してもらう場面設定が必要である。

「人間的な成長～基本的生活習慣及び社会に積極的に関わる姿勢確立」では、「生徒指導（挨拶、時間を守る、服装等）は適切である」の項目について、生徒・保護者の評価が下がっており、職員の意識とのずれが懸念される。昨今の校則見直しの動きを活用し、生徒や保護者との対話を重ねていく必要がある。

「自己の伸長～学校行事、生徒会活動、そして探究活動の充実」では、生徒及び保護者の評価が下がっている。コロナ禍の影響により実施できない、或いは縮小して実施した活動が多いこともその背景として考えられるが、コロナ禍の中でも自己の伸長に繋がる工夫改善が必要であると考える。

「進路目標実現～一人ひとりの視野を広げ、意識を高める進路指導」では、生徒及び職員の本校キャリア教育への評価は過去３年間の中でも最も高かった。一方で、保護者からの評価は下がっており、保護者への情報発信が課題である。

（３）自己評価総括表

「学校経営」では、「開かれた学校」、「地域とつながり、地域に選ばれる学校」をつくっていくにあたり、地域や異校種との連携、本校からの魅力発信の工夫改善を進め、オープンスクールや中学校説明会等の生徒募集に係る取組も戦略的且つ組織的に行うことができた。その結果が、受検者数の増加に繋がったと考えられる。一方で、業務改善のうち「働き方改革の推進」については、これまでの取組を踏まえつつ、教職員の業務負担の適正化を進めていくための方策を打ち出していく必要がある。

「学力向上」では、授業においてＩＣＴを活用する点については定着しつつあるが、「主体的で対話的で深い学び」を実現するには引き続き校内での検討が求められる。また、県指定のイノベーションハイスクールとして、「教科横断的」な視点から生徒の基礎的・基本的な学力の定着や向上を目指しているが、他教科に学び、他教科と連携する取組に至っていない現状があり、授業計画、授業づくりからその実践、そして評価まで学校全体として研究を深めることが必要である。同様に、「キャリア教育」に係る取組についても、現在の取組について検証を進め、３年後やその先を見据え体系化を進める必要がある。

「生徒指導」、「人権教育の推進」においては、これまでの本校の取組を踏まえつつ、生徒や保護者との対話を進めることで学校の指導や支援に対する理解を深めるとともに、主体性や自他を尊重する態度の育成など生徒の成長を支える体制構築が急務である。特に「いじめの防止」については、本校においてもケースの複雑化や多様化が見られ、未然防止と早期対応できる組織づくり及び教職員の資質向上に向けた研修の強化が必要である。

「特色ある教育」では、サイエンス情報科や体育コースにおいて、コロナ禍の中でもこれまでの取組を柔軟に見直し実践したり、新たな試みにも挑戦したりすることができている。普通科においては、ＩＣＴの活用や探究活動を中心にして生徒の発信力を高め、様々な学習を融合させて新たな視点や取組を生み出す機会や場面を増やすよう努めた。今後はこれらの各種取組を生徒の進路実現等に効果的に結びつけられるよう関連性や順序性について研究する必要がある。

６　次年度への課題・改善方策

（１）進路実現（夢）の実現に向けた取組の更なる充実

①初期指導を土台にして３年先を見据えた基礎学力や学習習慣の定着を図る。

②キャリア教育に係る各種の企画等を通じ生徒の意欲や主体性を向上させ、自ら進路を切り拓く意識を高める。

③模試等の実施内容や活用方法を見直し、個別指導のより柔軟で円滑な実践を図る。

（２）ＩＣＴ環境を最大限に活用した主体的で対話的で深い学びを指向する授業改革の進展

①授業研究旬間や他教科との情報交換の場等の教師間の学び合いの機会や場を拡充する。

②指導と観点別学習評価の一体化や教科間の連携による教科横断的な授業づくりに係る授業改善の研修等を実施する。

（３）生徒の心身の成長を見据えた指導・支援体制の確立

①入学から卒業まで生徒の３年間を見通した相談・支援体制を確立し、生徒・保護者に周知を徹底し理解を図る。

②生徒指導事案やいじめ事案等を未然に防止するための手立てや発生時の対応について職員間で共有し、適切且つ円滑な指導や支援を行う。

（４）特色ある教育の充実と生徒募集の工夫

①県指定「イノベーションハイスクール」として今年度計画・実施した取組を再点検し、西高の魅力づくりを進める。

②サイエンス情報科、普通科、普通科体育コース（スポーツコース）の特色ある取組等の魅力発信の方法について工夫改善する。

③地域や異校種等との連携を拡充して西高への理解を広げ、さらなる生徒募集につなげる。

（５）業務改革と働き方改革

①各分掌の業務の精選や分担の見直し等が進むよう、管理職と主任主事との連携や相談を密に行い業務の平準化を進める。

②西高のＩＣＴ環境を最大限に活かした業務改革について研究を進め、効果的な取組を学校全体に浸透させる。

③コロナ禍で縮小・精選等となった各種行事を企画するにあたり、業務改善の視点を入れて計画を策定する。